

## 納税という社会貢献

京都府立福知山高等学校附属中学校3年 辰巳 讚良

「税金」って何だろう。私が普段、税金を意識するのは、買物で消費税を払うときくらいだ。それも、少ない小遣いの中から出すことに対し、「どうして子どもの私まで払わなければならないの?」と常に不満を持っていた。だから、税金や国家予算と言われると、難しくて、自分とは無関係のものというように感じていた。

しかし、私自身の生活を振り返って考えてみると、高齢の祖母は老齢年金、父は障害年金を受給している。私も「子育て支援医療費」により、未だに医療費は無料である。なかでも、父は、私の幼い頃に病気で倒れ、その後遺症で働くことができない身体になってしまった。ある意味、母子家庭となった我が家にとって、年金の存在は大きい。とくに、突然父が倒れたとき、当時無職だった母は、収入を絶たれた上、父の看病とまだ幼い私と兄の世話もせねばならず、どう生活すればいいか途方に暮れたそうだ。しかし、長期間に渡る入院費には高額療養費制度の利用が、生活費としては傷病手当金が出、「経済的にも精神的にも、とても支えになった」と母は言っていた。調べてみると、これらの「セーフティネット」は税金の働きの一つで、私たち家族はそれに救われたと言うことができる。

なぜ私たちは、税金を払わなくてはならないのか。それは、人は誰もが「健康で文化的な最低限度の生活を営む」権利があるからだと私は考える。今、日本には、新型コロナウイルスによる経済困難から、貧困状態の人が増えている。かつての私たちと同じように、様々な施策による経済的支援で救われた人たちがいるだろう。しかし、それは、みんなが協力して税金を出し合うことで、初めて成り立つ。つまり、みんなにとって安心で健康的な社会を作るには、私たち自身が納税の義務を果たす必要があるのだ。

その一方で、今の日本は、多額の借金を抱えている。いわゆる「国債費」だ。今年度の赤字国債発行予定額は約71兆円で、累積1114兆円にものぼる。この借金を返すのは誰か。それは、今予算を決めている政治家ではなく、未来の私たちだ。そう考えると、私たちには、みんなが払った税金がどのように使われているか、その使い道を監視する責任があると言える。

日本では、少子高齢化が急速に進んでいる。これからは、今まで以上に、若者と高齢者も元気な人はみんなで働き、みんなで社会を支える——、そんな社会へと変わっていくのではないだろうか。私もいずれ大人になり、納税者の一員となっていく。今までみんなの税金によって助けられていた私が、今度は税金を払うことで、他の困っている人を支えていきたい。そのためには、みんなの意見を尊重する自由と責任ある社会を築き、私自身も政治や社会に興味を持ち、税制や税金の使われ方にも高い意識を持ち続けていきたい。